

第1章 「過疎地」と文化交渉

～周縁プロジェクト天草調査で考える～

藪田 貫

はじめに

7月25日に大阪を発ち、新幹線をのぞみ・さくらと乗り継いで、長島（鹿児島県）経由で牛深（熊本県天草市）に入った。その後3日間、牛深で調査を行ったのち本渡に移り、7月28日、天草宝島国際交流会館ポルトでの「地域交流講演会」を迎えた。以下に述べる小論は概ね、そこでの講演を基にしたものである。

牛深滞在中、天草市久玉の牛深やすらぎ荘に滞在した。山間部にコテージ然としてあるやすらぎ荘は、その姿からしてわたしたちの予想を覆したが、さらに温泉があるということで一層、わたしたちを驚かせた。同行した中国・韓国・台湾・ベトナムからの留学生たちが驚いたのも、もちろんである（温泉という公衆風呂の世界に慣れない留学生には少し、カルチャーショックだったようだが）。夕食の前後ばかりか、朝風呂も楽しめる。しかも、天然温泉ときているのであるから、わたしのような温泉好きにはたまらない。

しかしこの温泉、金がかかっている。聞くところによると、泉源の掘削は、熊本大学との共同で行われ、ふるさと創生資金1億円が投入されたそうである。金塊を買った町村があったということで話題を振りまいた創生資金であるが、ここ牛深（合併して天草市になる前は牛深市）では、温泉の掘削に使われたのである。当初、深さ1キロメートルから湯が出たそうであるが、湯量が少なくなって現在は、さらに深くまで泉源が掘り下げられている。その分、温泉の温度が下がり、それを沸かす重油価格の高騰が問題だという話であった。その後訪問した上天草にも、スパ・タラソという温泉施設があったので、温泉をともなう健康増進施設の建設は、過疎化した地域社会のひとつの象徴かもしれない。

泊まった翌朝、やすらぎ荘の周りを歩いていると、施設の前につぎのような案内板が架かっていた（写真1）。

農林水産省補助事業（平成7～8年度）

過疎化と農林漁業後継者不足が進行するなかで、恵まれた海洋資源と豊かな農林水産物を生かす一方、温泉等の地域資源を生かした総合交流促進施設を整備し、都市住民との人的・物的交流を図り地域の活性化と就業機会の確保及び安定安住化を図る。

一読して、天草の現状が理解された。ここは「過疎地」なのだ、私たちは「都市住民」として、過疎



写真1 牛深やすらぎ荘の案内板

の地で現地の人がとまみえているのだと。周縁プロジェクトの名の下に行なうフィールドワークとしてまず理解すべきは、天草諸島を含め、21世紀の日本を襲う過疎化という現実である。「日本列島のわずか5%の都市部に、95%の人口が集中している」というイビツな日本の現実である。

「日本列島のわずか5%の都市部に」云々との説明を受けたのは、牛深に来る途中に寄った長島町（鹿児島県）を訪れた時である。発言の主は、応対に当たった社会教育課長山崎友喜氏（関西大学法学部出身）である。

出水から天草下島へ至る間の飛び石の位置にある長島町は、戦国期、薩摩島津氏によって割譲されるまでは、肥後国の一部であったが、今は、鹿児島県に属し、その周縁部として所在する。現在、鰯業と唐芋・ジャガイモ栽培で全国的に知られているそうである。その結果、個々の住民の所得も必ずしも低くない。それでも、この島も過疎である。過疎債によって建てられた20基を超える風車が、島の頭頂部



写真2 牛深からみた長島

に並んでいる。50,400キロワットの出力は、西日本で最大ということである。「過疎債」というのは、過疎地に限定して認められた国債で、債務の70%が国によって返済される（残り30%が町負担）という条件が付いているものだと、山崎課長の説明である。

対岸の牛深から見ると長島町は目と鼻の先で、両地を往復する三和フェリーの向こうに、林立する風車が一望できる（写真2）。昨年が続いて訪問している天草——そこは日本の過疎地の一つであるという単純明快な事実。この事実の重みは、1年目に比べ2年目の今年では増えている。連続して訪問しているからであろう。歴史学であろうと、地理学であろうと、文化交渉学であろうと、すべての出発点は〈現代〉にある。

1. 周縁プロジェクト天草のはじまり

さて、天草を周縁プロジェクトのフィールドの地として選定したのは、東アジア文化交渉学 ICIS 全体の意向であり、わたしの選択ではない。しかし、わたし自身が推薦したことも、また強く希望したこともあるのは間違いない。そこにはどういう判断があったのか、つぎに、そのことについて説明しておきたい。

2006（平成18）年、「東アジアの文化交渉学」研究拠点が文部科学省のグローバル COE プログラムとして採択されるにあたって、その前提に、今年で125年の歴史を数える関西大学のさまざまな学術活動の蓄積があったことはいままでのない。そのなかでもとくに、今年、創立60年を迎える東西学術研究所の旺盛な研究活動は、長く所長であった大庭脩先生の名前とともに広く知られている。

周知のように大庭先生は、江戸時代の日中交流史を専門とし、1986（昭和61）年、「江戸時代における中国文化受容の研究」によって日本学士院賞を授与されるという栄誉に浴し、大庭脩先生と東西学術研究所の名を江湖に知らしめた。これによって先生の造語である「唐船持渡書」はひろく学会共通の学術用語となり、シルクロードに対し「ブックロード」という名称も発明された。

先生はまた長崎に向かった唐船が遭難し、日本の各地に漂着したケースを拾い、船ごとに資料を集めるプログラム「漂着唐船資料集」を提案し、みずから資料集を編集した。このプログラムは、その後、松浦章教授に引き継がれ、現在も継続され、12集を出すにいたっている。このプログラムはその後、漂着朝鮮船や漂着琉球船の調査・研究を刺激し、鎖国時代の日本海域を往来した諸船舶の漂着状況が明らかにされつつある。

わたし自身で言えば、1993（平成5）年に漂着唐船の研究に着手することで東西学術研究所の活動に参画したが、その後、大庭先生とともに「長崎唐館図集成」の調査・研究に従事した。これは、「通商の国」として長崎に来ていた中国人とオランダ人に幕府が与えた居留地施設を、絵画を中心に解明しようとするものである。いわゆる「出島」として知られるオランダ人の居留地施設は、1960年代にすでに、日蘭学会によって『蘭館図』として刊行され、ひとり唐館（唐人屋敷）のみが放置されていたのである。それを取り上げ、蘭館図と唐館図を、鎖国時代のようにペアとして復活させようと意図するものであった。大庭先生をはじめとする四名の共同の成果として2003（平成15）年に『長崎唐館図集成』が刊行されたが、大庭先生はそれを見ることなく急逝された。

以上の経緯から伺えるように大庭先生の業績は、鎖国時代の日中交渉史と集約できるもので、交渉の具体相が、中国から日本に来る船舶に拠っていたという事情から〈海上交通〉に焦点が当たった。この点はその後、「海域アジア史」として、海上交通を介してアジアの諸国・民族・地域が交流する姿を捉える視点として、多くの研究者に共有されるにいたっている。

いまひとつの具体相は、唐船の公認された寄港地が長崎であったことから、大庭先生の諸研究は、〈長崎〉に焦点をあてるものともなった。先生が生前、どれほど多く長崎を訪問し、長崎県立図書館や市立博物館などで資料調査を繰り返したかについては、わたしのような門下生でない者でも承知している。

大庭先生が一連の研究によって打ち出した二つの視点のうち前者の視点、つまり海域アジア史については、松浦氏らが継承し、いまや学会のメインストリームになっている。日本史研究者であるわたしが継承したのは、後者の長崎という視点である（より正確に言うなら長崎－大坂というべきであろう）。大庭先生亡き後、長崎大学名誉教授若木太一氏の協力を得て、長崎聖堂の研究を行ったことがその一証左である（2010年に『長崎聖堂祭酒日記』として、その成果を出版した。）。

こうして、わたしは大庭先生のライフワークである日中交渉史に、〈長崎〉という固有の場所を見出すのだが、驚くことに、現地長崎でも大庭効果は抜群である。「大庭効果」とは、長崎県立図書館や長崎市立博物館（現在は長崎歴史文化博物館）などの諸機関で、大庭先生の名前を出せばあらためて自己紹介の必要がないという便利さをいう。それは、大庭先生を通じて、東西学術研究所あるいは関西大学の名前が長崎で広く知られている、という幸運に結びついている。後人だけが享受できる先人の恩恵である。

歴史都市長崎が大庭先生のみならず、わたしなどにも門戸を開いているということは特筆すべきことである。もちろんそれは、関西大学関係者に限定せず、全国から広く研究者（老いも若きも）を長崎が迎え入れていることを意味する。その意味で長崎には、「よそ者」がたくさん入っているのである。それが長崎を観光地としてだけでなく、「長崎学」という学術のレベルにおける高さをも保証する力となっている。

長崎が一大観光名所であることは、言うを俟たない。大浦天主堂、グラバー邸、出島、唐人屋敷跡、新地中華街、ランタンフェスティバル、諏訪大社の「おくんち」などなど、名所を挙げれば枚挙にいとまない。しかし長崎が観光地として一段、他より抜きん出ているのは、観光が、長崎学という地域学とセットになっていることである。試みに、『旅する長崎学』という冊子を手にとってみよう。これが、わずか600円で入手できるのである。長崎文献社という地元出版社の献身的な努力もあるが、これほどビジュアルで、平易で、しかもたくさんのトピックを揃えた地域学のコレクションをわたしは知らない。この背景には、戦前以来の長崎学の伝統と蓄積がある。大阪学の確立していないわたしの目からみれば、ものすごい遺産だと思われる。『長崎聖堂祭酒日記』を共同で編集した若木太一氏も、みずから専門を近世文学と並んで長崎学と併記されているのである。

天草は、その長崎の隣である。しかし不思議なことに長崎学の視野に、天草は十分、入っていないようだ。世界遺産暫定リストに入っている「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、そのひとつの典型である。長崎市ほか四市二町で提案され、2007年（平成19）、暫定リスト入りしたが、天草灘で切り取られ、天草は視野の外にあった。なぜならそれが長崎県でなく、熊本県に属するからである。したがってここには、長崎県という明治維新以後の近代行政区分が貫いている。しかし歴史的世界としての〈長崎〉



写真3 天草市崎津の漁村景観

には、島原も五島も平戸も入れば、天草も入っていた。

その事実が考慮された結果、今日では「教会群とキリスト教関連遺産」が天草にも広げられ、長崎・熊本両県の提案として再構成されつつある。「長崎游学」シリーズの『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』第三版（2008年）には、堂々と天草が入った。さらに「平戸島の文化的景観」の選定（2010年2月）に踵を接して、2011年、「天草市崎津の漁村景観」が重要文化的景観に選定された（写真3）。世界遺産暫定リスト入りがきっかけとなって、天草と長崎を含んだ歴史的世界の回復が急速に進んでいるのである。この動きは、中心地〈長崎〉の隣にある周辺〈天草〉に関心を寄せていたわたしたちが、天草に飛び付くきっかけとなった。

こうしてわたしは、昨年（2010年）と今年（2011年）と二年続けて天草に来ることになったのである。

2. 天草を見る視点

日本列島における〈周縁〉として天草——現在は五橋で九州と繋がっているとはいえ、天草は古来、上島・下島からなる島嶼群である。その周囲を不知火海、有明海（島原湾）、天草灘が取り囲み、さらに西に視点をずらせば五島灘を挟んで五島列島がある。その向こうは、荒涼たる東シナ海である。

かつて歴史家網野善彦（1928～2004）は、『「日本」とは何か』（講談社日本の歴史00、2000年10月発行）の冒頭に、日本列島を反転させた地図を掲載してわたしたちを驚かせた。中国大陸が下にあり、その上に弧状になって日本列島が描かれている地図に網野氏は「環日本海諸国図」とタイトルをつけ、「日本海は大きな内海だった」とキャプションを配している（写真4）。そして「第二章 アジア大陸東辺の懸け橋——日本列島の実像」のなかで、つぎのように説く。

- アジア大陸の周辺には、北から南に、五つの巨大な内海（ベーリング海・オホーツク海・日本海・東シナ海・南シナ海）が連なっている。
- 日本列島の社会を理解するためには、五つの内海をはじめ、少なくともこのくらいの広い視野を

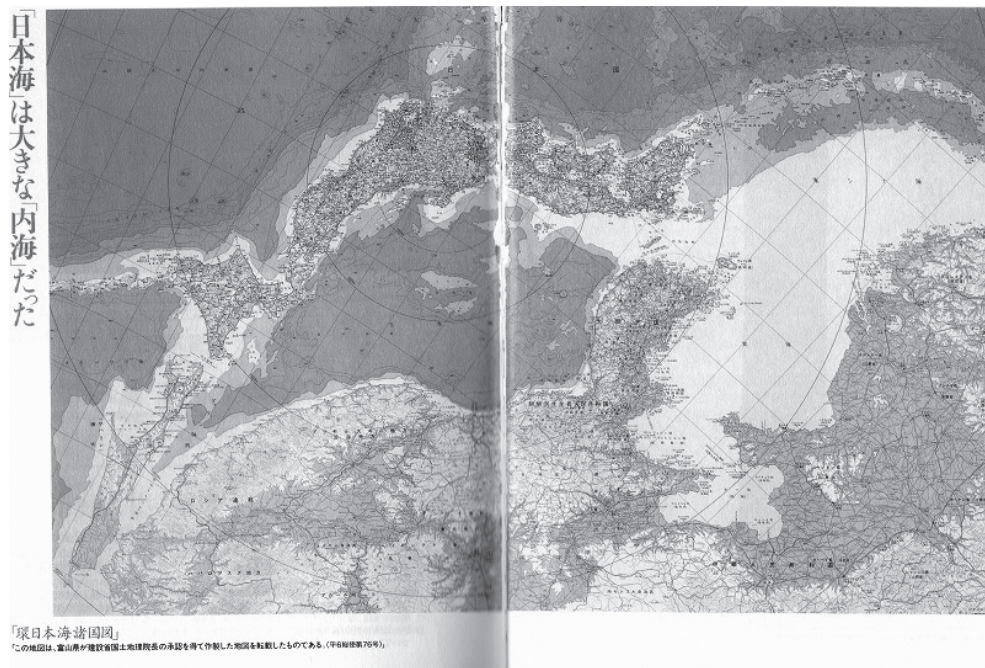


写真4 網野善彦氏が紹介した「環日本海諸国図」

持っていなければならない。しかしそれは陸の支配の論理ではなく、海そのものの特質を十二分に視野に入れた見方に立つ必要がある。

- 急がず慌てず、日和を十分に見定めて航行すれば、平穏な海ほど安定した快適な交通路はないと言ってよい。それゆえ、長い時間をかければ多くの人も膨大な物も、海を通じて運ぶことができるのである。荒れた海は、たしかに人と人を隔てる障壁になるが、こうした穏やかな海は、人と人とを緊密に結びつける、太く安定した交通路であった。
- 日本列島をアジア大陸から見るような形で、大陸の上に横たえ、富山を中心に二百五十キロ、五百キロから千五百キロまでの同心円を描いた地図で、実態は通常の地図と同じであるが、この地図からうける印象はまことに新鮮で、ふつうの世界地図の中の日本列島とはまったく異なったイメージをうけとることができる。
- この地図を見ると、北海道、九州、本州、四国、九州等の島々を領土とする「日本国」が、海を国境として他の地域から隔てられた「孤立した島国」であるという日本人に広く浸透した日本像が、まったくの思いこみでしかない虚像であることが、だれの目にもあきらかとなる。

やや極端なくらいにメリハリの利いた文章に、網野氏の意気込みが感じられる。陸の、稲作の、百姓の歴史でなく、海の、交換の、平民の日本史を構想した網野氏ならではの着想である。

網野氏のこの地図は、正式には「富山中心正距方位図」といい、富山県土木部企画用地課が取り扱うものである。そのために勢い、日本海が内海として前面に出ているが、それを南北に反転させると、天草を含む西海地域が南に大きく門戸を開いている姿が目飛び込んでくる。琉球弧と中国大陸・台湾に挟まれて弓なりに海が、フィリピンの方面、南シナ海に広がっている。1543（天文12）年の鉄砲の伝

来、1549（天文18）年のイエズス会宣教師ザビエルの来日を嚆矢とするポルトガル・スペイン勢力の来航は、まさにこの海上を舞台にして行なわれた。その結果、「東は俘囚の地に到り、西は貴賀が鳴に渡る」（新猿学記、11世紀）、壱岐・対馬・鬼界島（曾我物語、真名本、室町期）といわれた「西の境界」が激変した。平戸や五島、天草といった西海地域が、「西の境界」として歴史の前面に登場したのである。

事実、1566（永禄9）年、宣教師アルメイダが天草の志岐に辿りつき、やがて領主志岐麟泉の歓待を受ける。一方、生月島の代官ガスパル西玄可の子聖トマス西は、生月島に生まれ、有馬のセミナリオで学んだのち、1614（慶長19）年の禁教令でマカオへ追放されるが、1626（寛永3）年、マニラでドミニコ会司祭となり、台湾・琉球で布教し、1634（寛永11）年、長崎で捕らえられ死去する。たしかに網野氏の言うように「島と島との間のどの海峡も、人と人とを隔てる一面とともに、人と人とを結びつける役割を持っており、島々はすべて海を通じて結びついている」。「海が、本来、国境になじまない」のである。

近世の長崎は、幕府の海禁政策によって、「本来、国境になじまない」はずの海が閉じ込められることによって、対外関係を独占する地位を与えられた。それは西海地域における長崎の〈中央化〉であり、天草や平戸・五島などの〈周辺化〉である。長島町歴史民俗資料館に展示されていた「論単」は、その証拠のひとつである（写真5）。

それは九州沿岸に流れ着いた中国船と現地との間のコミュニケーションをとる手段で、漢文で出港地や来日の目的が問われ、長崎に廻航することを勧めている。長崎のように唐通事のいる場所では、口語でコミュニケーションできるが、それがいないところでは、既成の文面が用意されているのである。ところが静岡県や千葉県に流れ着いた唐船の場合には、まったくその用意がされていないために、唐船の漂着は上を下への大騒動となる。漂着唐船資料集が太平洋沿岸、しかも長崎や九州から遠く離れた太平洋沿岸で作成されているのは、そのためである。しかし長崎の周辺である長島などでは、中心地長崎に向かった船がコースをはずれ漂着することが織り込まれており、それが「論単」という形のコミュニケーションを取らせたのである。

本渡歴史民俗資料館で行なった石本家の美術品調査でも、長崎の〈周辺〉天草の位置を物語るものが



写真 5-1 長島町歴史民俗資料館

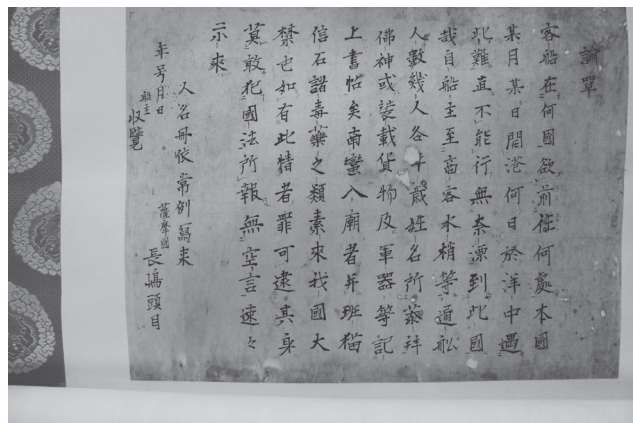


写真 5-2 論単（長島町歴史民俗資料館所蔵）



写真6 石本家資料調査班の4名（本渡歴史民俗資料館入口前）

あった（写真6）。それは草場佩川（1787～1867、肥前佐賀藩支藩多久家の家臣、文化8年朝鮮通信使応接に際し、韓人との唱酬で一躍、有名となった）や帆足杏雨（1810～1884、豊後戸次出身の南画家、田能村竹田から画を、帆足万里・広瀬淡窓から儒学を学ぶ）、仙涯義梵（1750～1837、美濃出身の臨済宗妙心寺派の僧侶、1781年に筑前博多聖福寺の第123世従事となり、以後、多数の禅画を残す）といった九州の書画家・漢詩人たちの作品と並んで、黄檗僧即非如一（1616～1671）や画家費晴湖といった渡来中国人の書画が収蔵されていることである。

他方、「島という世界」には、農林業・漁業・鉱業・商業などの複合的要素があることにも考慮すべきであろう。とくに天草は、上島・下島を問わない棚田の発達、牛深や鬼池・御所浦などの漁業、高浜の陶石と陶業、四通発達するフェリー航路など、その複合的要素で満ちている。それは便・不便とは別の次元で、島での生活様式を規定しているが、それを総体としてわたしたちは理解すべきであろう。

さらに「島の世界」は、海上交通による人びとの盛んな移動と変動Demographic Changeをもたらす。興味深いことに牛深八幡社の主宰神である八幡神は紀州（和歌山県）有田から招かれ、神主の田代家は、薩摩（鹿児島県）出水から移入したという（田代神主談）。このような人々の海上交通による往来と変動は、キリシタン信仰の普及と禁圧によって、一層、激化されたと思われる。たとえば高浜の旧家で知られる上田家は、鈴木重辰代官が天草を治める時期に、二代勘右衛門が高浜に来住したことに始まる。いかえれば、キリシタンの普及と禁圧は、島内の住民の交代、デモグラフィック・チェンジを激しくしているのである。

鶴田文史氏らによれば天草は、文献史的にみると天草八氏に始まるそうである。志岐・天草・上津浦・宮地・長島・栖本・久玉の八人衆であるが、1554（天文23）年以降、久玉氏が天草氏に吸収されるなど、志岐・天草氏らの有力五人衆に統合されることとなった。その後、1569（永禄9）年、宣教師ルイス・アルメイダの天草に来島することで天草島内は、キリスト教によって色分けされることとなる。キリシタン派は富岡の城主志岐麟泉であり、他方、久玉城主天草刑部太夫が反キリシタン派を代表した。7月26日、「牛窓ミニ地域史」と題する講演で吉川茂文氏は、天草刑部太夫らは反キリシタンの戦いの末、



写真7 牛深調査の一齣（右側が吉川茂文氏）

1572～73年に久玉城は落城し、「久玉の殿さんは相良（熊本県）に逃げらした」との地元古老の話を紹介した。その結果、天草はキリシタン一色になったものと思われるが、1590年ごろのポルトガルの「日本図」には、天草島の地名として唯一「Kutama」と書かれている。それを吉川さんは、「久玉のみ反キリシタンの手強き所」を意味するのだろうと説く。真相はなお謎に包まれているというほかないが、キリスト教の布教が島内を分裂させ、双方の戦いを通じて、デモグラフィック・チェンジが進行していたのは間違いない。ところが天草・島原の乱とその後のキリスト教の弾圧は、この事態を反転させることとなった。キリシタンの一掃によるデモグラフィック・チェンジの再来である。牛深八幡宮文書によれば、江戸期の天草郡88村のうち43の村に神職付神社があるが、全村数の半数に近い異常な神職者比率は、天草の「キリシタン以後」を物語っている（写真7）。

このように天草には、フィールドワークの醍醐味が秘められている。

3. 周縁プロジェクトに終わりはない

フィールドワークでお世話になった現地天草の方々の機嫌を損なうかもしれないが、一週間、天草を移動しながらわたしは、つぎに行く場所を考えていた。それは五島である。天草から西へ100キロメートル、福江島・久賀島・奈留島・若松島・中通島など大小140余りの島からなる五島である。なぜそれが気になるかといえば、五島もまた、長崎・平戸・天草・島原などと共通の歴史的世界に属していたからである。そこで天草を見たつぎには、五島を見てみたいという思いが強くなってきたのである。

文献史的にみると、八氏のち五氏が島内を分割した天草に対し、五島は、松浦党の一族であった宇久氏が1526（大永6）年ごろ、福江に進出し、根拠地とすることで一つの社会を形成したとされる。天草88カ村、23,000石、115,000人（18世紀末「天草島鏡」）に対し、五島65カ村、19,000石というよく似たサイズ。その一方、天草・島原の乱の後、天草は幕府領となり、五島は福江藩五島氏（1592年、宇久氏から改姓）の支配地として明治維新を迎える。しかし内実を問えば五島には江戸後期、大村藩からの「居

着百姓」が大量に移住し、のち隠れキリシタンとして歴史の舞台に登場する。ここにもやはり、キリシタンという地盤があった。それは今日、長崎・天草の全教会142のうち、52カ所（37%）が上五島・下五島にあるというデータに結実している（『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』2008）。天草とは異なったデモグラフィック・チェンジが、五島にはある。それがわたしの関心を呼ぶのである。周縁プロジェクトに、終わりはない。

翻って周縁プロジェクトを振り返ってみる時、わたしは以下に述べるような感想をもつ。

第1に、現地天草への入り方という問題である。2010年度は、熊本→上天草→本渡→富岡⇒長崎というコースを取ったが、それは陸路入り、海路出るという行程である。一方2011年度は、出水→長島⇒牛深→本渡→宇城→熊本のように海路天草に入り、陸路を使って出た。天草五橋（宇土から上天草）と黒之瀬戸大橋（出水から長島）が架けられているといっても、天草に出入りするには海路が欠かせないという厳然たる事実である。今後、長崎にも鹿児島にも陸路繋がることで天草は〈島〉であることを止める瞬間があるかもしれないが、いま現在は、れっきとした島である。移動するためには船がなければならず、そのために複数の海上ルートが展開し、それを担う海運会社が存在する（写真8）。

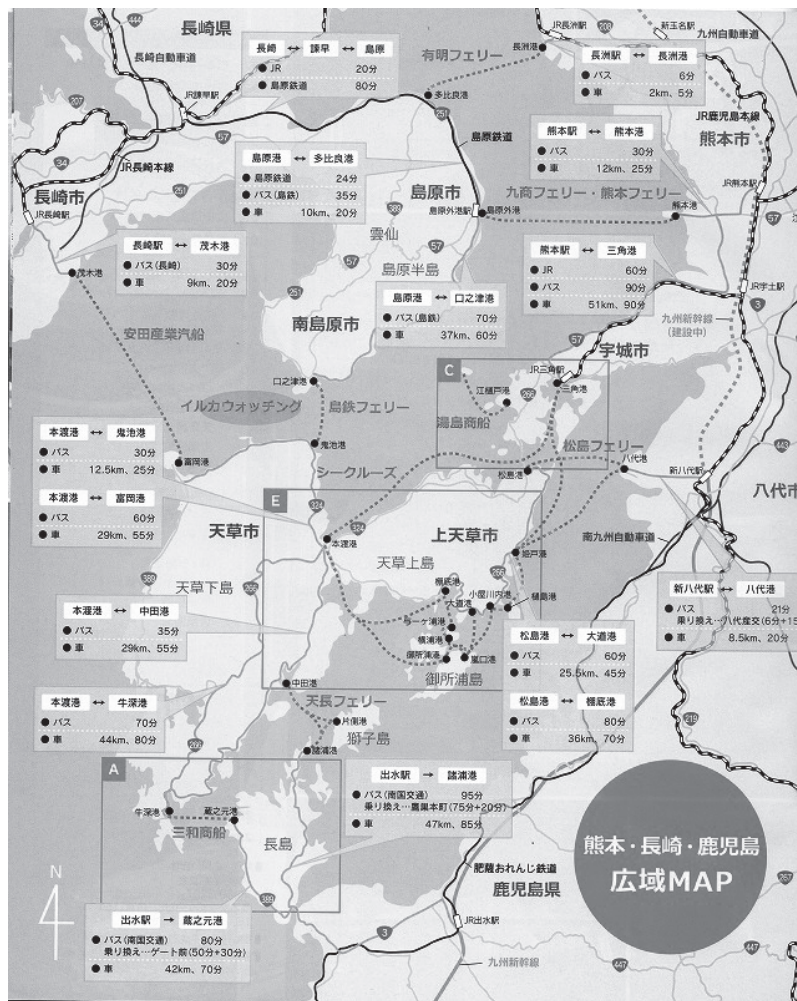


写真8 天草を取り巻く案内マップ

こんな経験は、いつでもどこでも獲得できるものではない。二カ年のフィールドワークを通じて、日本はもちろん中国・台湾・韓国・ベトナムの留学生たちは、普段、それぞれの母国でも経験できない体験を天草でしたのである。これを一言でいえば、周縁プロジェクトと〈島〉である。日本が島国であることを、彼ら彼女らは天草での体験を通じて学んだ。

第2に、〈キリシタン〉以前と以後という問題である。天草であれ、長崎・平戸・島原・五島であれ、この海域世界を結びつける要因には海路と並んでもうひとつ、キリスト教の受容という問題がある。その受容は、拒否や禁圧、潜伏、移動などの要素を含みこみながら、これら西海地域をひとつの歴史的世界とした。しかし、その色合いの濃淡はさまざまで、禁圧後の状況には大きな偏差があった。上五島・下五島の教会52カ所に対する天草の3カ所という対比が、「キリシタン以後」を如実に示す。キリシタンの島と思われがちな天草は、実際のところ、五島よりもはるかにキリスト教徒の影が薄いのである（写真9）。

そんな天草のイメージと実態の間にある落差を、フィールドワークに従事した学生たちは容易に見抜くこととなった。今回、長島／牛深／御所浦／棚底／高浜／大江／湯島／三角と移動したが、彼ら彼女らが、その過程で見出したテーマの多彩なことは、報告書の目次を見るだけで明らかである。実際に天草各地を調査する中で、彼らの柔らかな頭脳が素直に反応したのである。やはり「若い」ということは素晴らしい。

第3に、大都市の陰画としての〈周縁〉という問題である。わたしたちのルートからも分かるように、出入り口には熊本・長崎・鹿児島という県庁所在地＝中心があり、天草は、どちらからみてもその周縁にある。その意味でも十分に〈周縁〉の重みを持っているが、その重みをわたしたちの住む大阪を引き出すことで衝撃を与えたのが、「日本列島のわずか5%の都市部に、95%の人口が集中している」という言説である。わたしたちはその5%に住んでおり、天草は、残り95%の一つであるという事実は、わたしたちと天草との関係を端的に教えた。一方の過疎地に対する、他方の大都会である。つまり天草は、大阪や東京・名古屋の陰画としてある。言い換えれば、わたしたちにとっての〈普通〉が、天草では〈普



写真9 木下奎太郎「あまくさ」の歌碑

通ではない〉ということである。湯島に学生3名と船に乗って渡ったとき、わたしたちの誰しも、そこには小さいといえども食堂、あるいはコンビニがあるだろうと思い、昼食を当てにしていた。ところが港の周辺には、「何もない」。わずかに1軒の店を見つけ、カップラーメンで空腹をなだめるほかに術がなかった。その分、夏の夜の空の美しさは喻えようがない（写真10）。

とはいえ厳しい見方をすれば、これだけの過疎地に住み、現地の人々はどのような希望をもっているのだろうか、と気になった。わずか一週間の滞在だから、わたしたちは「非日常」として〈普通でない〉生活を楽しんでおられるが、もしそこに住み続けるとすればどうであろう……

ここで想起されるのが、「定住人口」に対する「交流人口」という概念である。一つの地域には定住人口ばかりでなく、時たまに、しかも自分の都合でしかやってこない「交流人口」がある。わたしたちは一週間、天草各地の交流人口としてカウントされているのである。つまり交流人口として歓待されたのであり、定住など予想もされていない。そんな気まぐれな交流人口でも、過疎地の活性化に役立っているだろう。そこに一つの希望があるのではないか……。天草でも長島でも、カラフルで中味の充実したパンフレットが各種、作られているが、その目線の先にあるのはわたしたちを含む交流人口であること



写真10-1 湯島調査ミーティング



写真10-2 湯島・宮崎常治氏



写真10-3 湯島調査メンバー

は間違いない。

第4に、〈文化交渉〉におけるチャンネルの問題である。文化交渉は、いろいろの違いを超えることで成り立つ。「違い」のあることが前提である。その違いには、言語・習慣・性差・世代・国籍・出身地・キャリアーなど様々な要素があるが、周縁プロジェクトに参加したわたしたちは、それぞれに違いを超えている。報告書に収められた学生たちのレポートは、必ずしも明示されていないが、違いへの自覚がある。先に触れた大都会暮らしと過疎地という違い、国籍の違い、言語の違い、食習慣の違い、性差と世代差などなど。

こうした違いを超えて実施される周縁プロジェクトであるが、現地で話を伺った方々は、ほとんど男性で高齢者であった。長島町山崎友喜氏、牛深吉川茂文氏、本渡鶴田文史氏・平田豊弘氏、湯島宮崎常治氏などの氏名を並べると、さらに高学歴（大学卒）という特徴も指摘できる。目の前には、牛深海彩館とやすらぎ荘で働く中年女性たちが複数、居られたが、その方々から話を聞く機会をわたしたちは逸した。文字通り「後の祭り」であるが、この教訓は、文化交渉におけるチャンネルという問題を提起していると考えられる。

わたし自身、現地調査やフィールドワークに疎いという人間ではない。最近も、13年間継続してきたフィールドワークの報告書『鷺浦（島根県出雲市）』を出したが、天草での周縁プロジェクトは、〈文化交渉〉というキーワードの下に実施されることで、いくつかの重要な問題に気付かせてくれた。天草でお世話になったすべての方々、同行してくれた学生諸君、二カ年の周縁プロジェクトを共同で推進した野間晴雄教授と荒武賢一朗助教に心から感謝の意を表したい。

